

カント『純粋理性批判』における理性の認識の限界

山口県立大学社会福祉学部4年 松本 紗知

はじめに

カント『純粋理性批判』は、「人間の理性はいかなる範囲で、いかなる仕方でも認識をなしうるのか」という問いについて書かれた哲学書である。カント以前の近代哲学は、神の存在、魂の不死、世界の始まりなどをめぐって様々な形而上学的議論が展開されていた。しかし、イギリス経験論と大陸合理論という二つの立場で意見が対立し決着がつかない状態が続いていた。また、この頃は自然科学が大きく発達した時代でもあり、自然科学や数学などの知識の客観性の有無についても問われていた。カント『純粋理性批判』は、このような形而上学的議論の混乱を整理し、そして自然科学の客観性と必然性を基礎づける目的のために生まれた。

まず、カントは、人間の認識の仕組みを三つに分けて考える。それが「感性」「悟性」「理性」である。感性は、外界からの刺激を受け取るはたらきである。このとき私たちは、すべてを「空間」と「時間」という枠組みの中で捉えている。カントによれば、空間と時間は外界そのものの性質ではなく、私たちが事物を感じ取る時に最初から備えている「ものの見方」である。したがって、私たちが知っているのは、物そのもの（物自体）ではなく、あくまで私たちの認識の枠組みを通して現れた「現象」である。次に悟性は、感性によって与えられた情報をまとめ、秩序づけるはたらきである。ここで重要なのが「カテゴリー（純粋概念）」である。たとえば「原因と結果」という考え方（因果性）は、経験から学ぶというより、経験を成り立たせるために私たちがもともと用いている考え方だとされる。このように、感性の枠組み（空間・時間）と悟性の枠組み（カテゴリー）が合わさることで、私たちの経験的な認識は成立する。カントは、人間が認識できるのはこの「現象」の世界だけであり、「物自体」そのものは知ることができないと考えた。

そして、最後が「理性」である。理性とは、すべてのことに最終的な理由を求めようとする力のことである。カントは、人間の理性は神・魂・世界の始まりのような「究極の答え」まで求めてしまうと述べた。今回の発表では、この理性に焦点を当て、人間の理性の認識の限界はどこなのか、なぜ人間は答えの出ない究極真理について考えてしまうのか、そして、そのような行為はどのような意味を持つのかについて、詳しく見ていくこととする。

1. 理性の本性と誤謬推理

(1) 理性とは

では、ここからは理性について詳しく説明していく。理性とは考え、推論する力のことである。悟性は直観と結びついて働くのに対し、理性は必ずしも直観に縛られるわけではない。

理性は、特に感性の直観形式である「時間・空間」の中で経験されうる事物の次元にとどまっている限りでは、具体的な観察や記録に基づいた合理的な判断が可能であるため皆が共有できる答えに至ることができる。しかしながら理性は、つまり、時間意識や空間意識に直接的には拘束されない。そこで、直観形式の中で直接に経験されうる事物の次元を超えて、例えば理性は原因と結果のカテゴリーを使ってどんどん推論を進めることがある。「A が起こった原因は B である。では、その B を生み出す原因は何か、原因の原因、そのまた原因は？」という風に推論に推論を重ね、最終的には認識しえない叡知界(物自体)や神や魂のような超越した存在にまで行きつこうとする。ここに、理性の認識の限界があり、理性はその限界を超えてさらに認識をしようとする本性をも持つのである。

カントは、人間は生まれながらにして「理性」というものを持っており、その「理性」は、認識しえないものを認識しようとする本性を持っていると主張した。そして、カントは、理性が求める答えの出ない問いを「魂の不死」「世界の始まりと終わり」「神の存在」という3つにまとめた。これらは、カント以前の哲学者も扱ってきた、伝統的なテーマである。

(2) 誤謬推理 ——魂について——

「魂の不死」とは、形而上学において取り組まれてきた問題である。かつて、大陸合理論の立場であったデカルトやライプニッツは、理性で魂や自己の不死性について証明できると考えていた。しかしながら、カントの立場は、「魂の不死」の問題は重要であると認めながらも、これを証明できるとは考えない。

例えば、デカルトの「われ思う、故にわれあり」は、「私は考える(思う、疑う、認識する)存在であり、この思考行為そのものが、私の存在の確実な証拠である」という意味である。そして、魂(精神)は思考する実体としての自我であり、身体や物質とは異なる独立した存在であると考えられている。デカルトにとってこれは絶対的で確実な真理であった。このような魂の本性について演繹的に説明しようとする試みとして合理的心理学が用いられてきたが、カントは合理的心理学について、形而上学的誤謬に陥る一例として批判している。なぜなら、合理的心理学は一切の経験的な内容を排除しており、「私は考える」を唯一の絶対的な真理としているからである。カントは、デカルトのように「考える私」を独立して存在する実体としてではなく、認識の条件として捉えている。

カントにとって「考える私」とは、世界を経験するとき必ずそこにある意識の中心のことである。例えば、私が青い空を見て風の冷たさを感じているという2つの感覚を持っているとき、「青い空を見る」「風の冷たさを感じる」のどちらも「私」が感じているものである。この、様々な「私」が感じる経験を1つの私のものとしてまとめる力を統覚の統一と呼ぶが、カントによれば、「私」はすべての経験をまとめるための条件であり、世界を経験を可能にする仕組みであるにすぎないのである。したがって、経験の条件である「私」は客観的存在として認識することができないのである。しかしながら、カントの見るところでは、デカルトはこの「私」の存在を客観的存在と取り違えて証明できると誤って考えている。

カントはこれを誤謬推理であると述べ、批判している。誤謬推理とは推論における失敗を意味しているのだが、これは、理性が直接的に時間意識や空間意識に直接的には拘束されないことが要因となっている。理性は、時間と空間、つまりは現象界にとどまる範囲を超えた事物について考えてしまう本性を持つが、現象界を超えた次元について認識することはできない。それにも関わらず、認識できると考えてしまうところで、誤謬推理に陥るのである。

2. アンチノミー ——二律背反——

(1)二律背反

カントは、人間的理性は、拒絶することはできないがしかし解答することもできない、いくつかの問いによって悩まされているという特異な運命を持つと言う (AVII)。カントは、答えの出ない問いとして4つのアンチノミーを挙げ、なぜそれらに答えが出ないのかを示している。アンチノミーとは、対立する命題がどちらも証明できてしまいどちらが正しいのか決着がつかない状態のことを指す。日本語では二律背反と呼ばれる。対立する2つの主張にはテーゼとアンチテーゼとがあるが、テーゼとは、日本語では正命題と言われるもので主張や論理を意味するものである。一方でアンチテーゼとは反命題と言われるもので、テーゼに対する反対の主張や反対の理論を意味するものである。カントの取り上げるアンチノミーは第一から第四までであるが、今回は第三アンチノミーと第四アンチノミーに焦点を当てていく。

超越論的理念の第三の抗争

テーゼ

自然の法則にしたがう原因性は、世界の現象がそこからことごとく導き出される唯一の原因性ではない。世界の現象を説明するためには、なお自由にもとづく原因性を想定することが必要である。

アンチテーゼ

自由は存在せず、世界におけるいっさいはひたすら自然の法則にしたがって生起する。
(B472f.)

この第三アンチノミーは、簡単に言えば、「人は自由に行動できるのか、それとも全部が因果性により決まっているのか」という問いである。カントは、テーゼとアンチテーゼのどちらの答えも正しいと考える。テーゼを主張する立場としては、「人間が道徳的責任を問われるのは、意志が自由だからである。」というものがある。もしも、すべての行為が自然的因果関係に縛られていたとしたら、犯罪や悪徳行為は「そうせざるを得なかった」と言い逃れが可能になってしまう。そのため、道徳や法の根拠づけのためにも自由という概念を認めようとする。しかしながら、テーゼと両立はしえないアンチテーゼの立場も、また正しい。

現代でも脳科学や遺伝子研究が進むにつれ、人間の行動や意志決定は生物学的条件によって規定されるか否かという議論が展開されたりもするが、もしも、人間の行為だけが自由な意志決定によるものだと仮定すれば、これまで信じてこられた世界の法則性が破綻してしまう。

このように、人間の理性は、現象界における認識の範囲内では、矛盾に行き着いてしまう。そこで、カントは「人間は現象界においては因果律に従うが、叡知界においては自由を持つ」とする。カントは、第三アンチノミーを解決するにあたって、人間の認識が成立する現象界のみならず、現象界の次元を超えた叡知界(物自体) という次元を認めようとする。つまり、同じ人間を2つの異なる視点で理解して、科学的に説明することができる現象と、倫理・道徳を支える自由は別の次元にあるべきだと主張するのである。

超越論的理念の第四の抗争

テーゼ

世界には、その部分としてであるか、あるいはその原因としてであるか、端的に必然的な存在者である、或るものがぞくしている。

アンチテーゼ

端的に必然的な存在者は、世界のうちにも世界の外にも、世界の原因としてはおよそ現実存在することがない。(B484f.)

第四アンチノミーでは、世界の根源には絶対に必要な存在(神)があるか、という問いが扱われる。テーゼは「そうした存在がある」という立場である。古来より試みられてきた神の存在証明の手法と深く結びついており、その論証を要約すると、次のようになる。「経験世界のあらゆる存在は原因に依存しており、その原因もまた別の原因によって条件づけられている。この因果の連鎖を無限に遡ると無条件に存在する根源的実体(絶対に必要な存在)がなければならない。これが神と呼ばれるものだ。」

一方で、アンチテーゼは、そのような必然的存在の証明は不可能であり、そもそもそのような存在は必要ないという立場である。私たちが経験する世界は因果関係によって説明が可能であるが、この因果関係をどこまでも遡ったとして、そこから絶対に必然的な存在の実存を導く論理的必然性はない。このような神を想定するような考え方は論理的な飛躍であるとしてテーゼ側の主張を批判する。

カントは、テーゼ、アンチテーゼどちらにも理があると考え、「神の存在証明は理性によっては証明も反証もできないが、道徳や倫理的な観点からは信仰する意義がある」と述べている。これは後の『実践理性批判』で扱われる問いとなった。

さて、ここまで2つのアンチノミーについて見てきたが、これらのような、考えても答えの出ない問いを考え続けてしまうのは人間が「理性」を持っているからであった。理性は推論に推論を重ね、最終的には究極真理に至ろうとする性質がある。このような究極的で完全

なものとして理性が思い描くものを「理念(イデー)」という。この理念は、現象界を飛び出して事物を考えてしまうため、このようなアンチノミーに陥ってしまうのである。

しかし、カントは、このような理念について無意味なものであるとは語っていない。理性によって思い描かれた理念は、認識や理論の領域ではなく行為(道徳)の領域で考えられるべきであるとカントは述べている。神や魂のような超越した存在の証明は不可能であると結論づけたカントであったが、人が「よく生きる」ためにはそのような存在を信じるが必要であると述べたのだ。純粹理性批判の終盤では、人間の認識、理性の限界を明らかにしてうえで、人が「よく生きる」ためには何が必要であるのか、そこで神や魂のような存在はどのような位置づけをされるべきであるのかが書かれている。

(2) 答えの出ない問いの先へ

先に見た誤謬推理とは、自己意識である「私は考える」という事実から、魂が単純で不死の実体であるといった性質を論証できると考えてしまう誤った推論を指す。これは内的経験から魂の実体的本性を認識できると誤解することによって生じる。

一方でアンチノミーとは、世界全体について理性が思考すると、互いに矛盾する命題がどちらも理性的に正しいと証明できてしまう状況を指す。例えば、人は自由に行動できるのか、それとも全部が因果性により決まっているのかという主張のどちらもが論証可能となる。このように、誤謬推理が魂についての誤った推論であるのに対し、アンチノミーは世界全体について理性が自己矛盾に陥る点に特徴がある。

しかし、誤謬推理もアンチノミーも、理性が経験の範囲を超えて対象を認識しようとすることで生じる誤りであるという点に関しては、共通する。カントによれば、人間の理性は事物の最終的な根拠を求める性質を持つため、経験によって与えられる範囲を超えて、魂や世界全体といった対象についてまで認識しようとする。しかしそのような対象は経験によって与えられるものではないため、理性は正しい認識に到達することができない。その結果、誤謬推理では魂の本性について誤った推論が行われ、アンチノミーでは世界全体について互いに矛盾する命題がともに論証されてしまう。したがって両者は、いずれも理性が本来の認識の限界を超えて働くことによって生じるという点では同じである。

それでは、私たち人間であれば一度は考えたことのある認識の限界を超えた究極真理についての問いについて、これらを考えてしまうことは無意味なことなのだろうか。カントは、神や魂のような超越したものは存在証明ができないからと言って、無意味なものであるとは考えなかった。むしろ、道徳的な立場から見ると、人間が生きていくためには、自分が自由であると信じ、善を行う努力が最終的には報われる世界(神や来世)につながることを信じるのがどうしても必要であると述べたのである。カントは純粹理性批判の序文でこう述べている。

だから私は、信に場をえさせるために知を廃棄しなければならなかった。

(BXXX)

この言葉は経験の範囲を超える事柄(神や世界の始まり、魂)について、論理的な知識を得ることはできないと理性の限界を設けたうえで、人間にとって必要不可欠な「信仰」のための領域を確保したという、カントの哲学的な立場を表している。

3. 人間的立場からの形而上学

(1) 人間に自由はあるのか

先ほど確認した第三のアンチノミーでは、「自由はあるともないとも言えない」という結論に至ったが、認識ではなく実践し行為する立場からすれば、自然の法則に縛られない自由があるとカントは述べている。どういうことか。

カントの認識論において、人間の自由は、理論や理性では証明も否定もできないが、実践理性においては必須となる概念として位置づけられる。認識においては、経験可能な世界、つまり現象界は因果律に従うため、そこでは自由な因果性は成立せず、人間の行為も自然法則によって決定されているように見える。これが、「自由は存在しない」とする立場を支えるが、一方で、道徳的責任や主体的な行為の始まりを説明するには何らかの自由が必要になる。こうして理性は「自由はある」と「自由はない」という両立しない主張を同時に導き、第三アンチノミーに陥るのであった。ここまでは先ほど確認した。

カントはここからさらに、道徳法則の可能性条件としての自由を強調する。人間が自ら立てた法則にしたがって行為するためには、自然因果律から独立した自由な意志が必要であり、これをカントは「自律」と呼ぶ。つまり、人間は道徳的責任を成立させるために、行為の根源に自由な意志を持たなければならない、ということである。自由は論理的には証明できなくとも、実践理性の立場から必要とされるものである。カントの認識論において、外から見た人間の行動は空間、時間の中で生じたことであるため現象界に属する。しかし、同時に人間の心(魂)については私たちは認識することができない。そのため、心や魂については物自体(叡知界)に属している。認識の対象としての人間は現象界に属し、実践の主体としての人間は叡知界に属する。こうして人間は、現象としては因果律に従う自然的存在でありながら、物自体としては自由な存在でもあるという二重の地位を持つのである。

(2) 自由は道徳法則を可能にする

純粋理性批判は、「認識の限界」を明らかにすることを主な目的として執筆されたため、カントの考える道徳の内容が直接的に説明されているわけではない。後の『実践理性批判』で道徳法則については詳しく論じられるのであるが、純粋理性批判では、その前段階として、道徳が意味を持つための条件について書かれている。先ほども述べたように道徳には必ず「自由」が前提として必要である。では、自由が確保された人間にはどのようなような道徳行為が求められるのか。後の実践理性批判に繋がる道徳的義務について少しだけ確認

しておく。

カントの道徳的義務は、理性が自ら立てた普遍的な道徳法則に従って行為すべし、という無条件の命令である。例えば、「〇〇だから～した」というような行動は、因果律に縛られた行動によるものなので真の自由とは呼べない。人間はこの因果律に縛られない選択もできるのであるから、そのような行動をするべきであると述べている。このような道徳の原理をカントは定言命法と表現した。自分の欲望や利益ではなく、普遍的に妥当する原理に従って行為をするということは、人間が理性的で自由な存在であることの証でもある。カントの代表的で有名な言葉として、「汝の意志の格率が普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」というものがあるが、ここで重要なのは、行為の基準が個人的な欲望や結果ではなく、「万人が同じ状況で採用しても矛盾しないか」という理性的判断が置かれる点である。このような行為者がある行為を自ら心の中でチェックする主観的な行為原則をカントは「格率」と呼んだ。言い換えると、「この状況ではこう行動すべきだ」という個人的な指針である。道徳判断では、この格率が普遍的な法則として立つかどうかを定言命法により吟味し、矛盾なく普遍化できる場合のみ道徳的に許されるとされる。例えば、「困ったときには嘘をついてもよい」と自分を許したとする。カントによれば、この格率を普遍化すると「誰もが困ったら嘘をつく世界」が想定され、結果として約束という制度自体が成り立たなくなり、嘘をつくという行為そのものが意味を失う。つまり、普遍化すると自己矛盾に陥るため、この格率は道徳的には許されない。ゆえに「嘘をついてはならない」という義務が成立する。これは結果が良いか悪いかではなく、理性が普遍化に耐えうる行為を要求するからである。

また、このような義務は外から押しつけられる強制としての義務ではなく、理性的存在として自分が自分に課す法則である。例えば、落ちていた財布を拾ったとき、「誰も見ていないから持ち去っても損はない」と考えることはできる。しかし、理性に照らして「他人の財産を尊重すべし」という格率を普遍化すれば、社会全体の信頼が成り立つ。これを自ら選ぶ取ることが「自律」であり、義務に従うということは、欲望ではなく理性に従う自由の行使でもある。したがって、カントの「～すべし」という定言命法による行為は、自由な意志が理性によって立てた普遍的法則に従うことを意味し、道徳は結果ではなく、義務から行為する意志そのものの価値に基づいているのである。

おわりに

カントの『純粋理性批判』における理性は、ものごとをできるだけ大きく、根本から説明しようとするはたらきである。私たちは、何かしらの出来事を見ると「なぜ?」「その原因は?」と考え、さらにその先の原因まで求めていく。理性はこのように、推論に推論を重ね、答えの出ない究極的な真理まで求めてしまうようになる。しかし、人間が実際に知ることができるのは経験できる範囲（現象界）だけである。それにもかかわらず理性は、世界の始まりや魂、神の存在など、経験できないことまで考えようとする。そのため、ときに答えの出ない矛盾（アンチノミー）にぶつかる。カントは、理性は大切だが、使える範囲をわきま

ることが必要だと考えた。

そして、カントの考える道徳とは、行為の結果ではなく、その動機が正しいかどうかに関係なく、人を置く立場である。人が利益や感情によってではなく、「そうすべきだから」という義務の意識から行動するとき、その行為は道徳的であるとされる。カントはこれを定言命法として示し、「自分の行為の原則がすべての人に当てはまってもよいか」を基準にせよと説いた。また、人間を単なる手段としてではなく、それ自体が目的として尊重すべき存在だと考えた。理性に基づき、普遍的に正しいといえる行為を選ぶことが道徳の本質である。

私は、『純粋理性批判』を読んで「神は理論で証明される存在ではなく、道徳を考えるために必要な存在である。」という部分に感銘を受けた。理性の限界を認めながらも、人間が道徳的に生きるための意味を考えようとした点は私にとって新しい視点であり、興味深かった。『純粋理性批判』は内容が難しく、すぐに理解できない部分も多かったが、この本を読んだおかげで私たち人間が物事をどのように認識し、どのように生きるべきかを改めて考えることができた。

参考文献

Kant, *Kritik der reinen Vernunft* (1787), B (=2012, 熊野純彦訳『イマヌエル・カント 純粋理性批判』 株式会社作品社.)

西研 (2023) 『NHK「100分 de 名著」ブックス カント純粋理性批判～答えの出ない問いはどのように問われるべきか?』NHK 出版

御子柴義之 (2020) 『カント 純粋理性批判 シリーズ世界の思想』KADOKAWA

金子武蔵 (1974) 『カントの純粋理性批判』以文社